

「豚髻入」とその周辺

田畑, 千秋 / TABATA, Chiaki

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

336

(終了ページ / End Page)

351

(発行年 / Year)

1978-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002729>

「豚俎入」とその周辺

田畑千秋

(一)

昔話に登場する動物に関して柳田国男は「氣をつけてみると役者の数が又限られて居る。たとえば日本では野猪がめったに登場せず、西洋でも昔から家畜であった豚があまり省みられて居ない……」(『口承文芸史考』「昔話と伝説と神話」と、昔話には「猪」や「豚」が登場しにくい事を説いておられる。しかし、柳田の時代からすると昔話の採集は非常に進んでいる。たとえば、関敬吾博士の編んだ『日本昔話集成』全六巻で一応は日本に伝承されている昔話の話型が網羅された。しかし、その後採集された話型も相当数ある。柳田の指摘した「めったに登場しない野猪」も、「猪俎入」という話が広島、香川等々の西日本で二十話程確認されている。また、この稿の中心となる「豚」も西洋のことは別と

しても、奄美、沖縄などの話には登場してくる。柳田の「野猪」や「豚」に対する指摘は、採集のあまり進んでいない時期の指摘であろう。台湾の原住民にも山豚が人間の女と交わる話が伝承されている。

(二)

豚に関する話が日本本土に採集されていないことは事実である。それは仏教伝来以後、日本に豚を食用とする習慣が薄れ、豚と人間との生活上のつきあいが少なくなってきたためであろう。大藤時彦教授は「神事に血忌をきびしくさけることが問題」である、と「南島の食物文化」(『民間伝承』所収一六六)という論文で述べている。「伝統的食事文化の世界的分布」(『Ergon』31・1971・1)の分布図をみても、伝統的に豚を食用とする地域は、南太平洋諸島からニューギニア、東南アジア、中国、朝鮮半島、そして、奄美、沖縄までで、種子、屋久以北の日本本土では食用にされていないことがわかる。しかし、猪を家畜化して作る豚が、すべての本土人に忘れられていたわけではない。天平年間にすでに豚の飼育された記事が出てくるし、『雑兵物語』下には「是よりは、鳶でも豚でも蕪でも大根でも櫟でも皂莢でもひつかいて……」と、庶民達は豚を鳶、大根、蕪、櫟、皂莢等の重要な食物と同じように食していたことがわかる。それが仏教伝来以後、明治になるまで豚を食用とする風が日本

にはなくなっていた、というような辞書の解説はしばしば誤解を生む。『和漢三才図絵』卷三十七の「豕」の項には「豕、以易畜長崎及江戸處、多有之、然本朝不好肉食、又非可愛翫者、故近年畜之者希也……」と豚は飼育が容易で、長崎や江戸には多く飼育されていた。しかしながらわが国では肉食を好まず、また愛翫すべきものではないので、近年はやしなうものが少なくなった、と載っている。本土でも全く飼育の風がなくなっていたわけではないことがこれでもわかる。

(三)

日本の説話文学において、異類と人間の婚姻、あるいは性的交わりは多い。日本最初の仏教説話集『日本国現報善惡靈異記』から『今昔物語』等々、それに続く諸文献はもちろんのこと、口承でも「蛇掣入」「猿掣入」「狐女房」等々、数えあげればきりがないほど人々は異類と交わってきた。

しかし、異類でも家畜が人間と交わることは本土ではあまりみうけられない。一番人間の近くにいる、一番交わってもよさそうな動物達だが、あまりそれがない。家畜の例としては、主に東北地方に伝承されている「馬娘婚姻譚」や主に西南日本に伝承されている「犬掣入」が大きな例である。「犬掣入」が奄美、沖縄、四国地方に採集例が多いのは、その地域に伝承されるなにかがあったことを意味している。

この稿では、研究者達がまだ誰も注目していない家畜と人間の交わる話（馬と女」「犬と女」「山羊と男」「豚と女」「豚と男」）が奄美、沖縄の南島に多く存することを確認し、特に豚と人間の交わる話とおして、南島の人々の「豚」に対する精神的、経済的条件・状態をさぐる助けになればと思っている。

豚と人間が交わる話の型には二つあるように思える。それは、

- 1 「豚掣入」とでも名づけられる型。
- 2 「豚女房」とでも名づけられる型。

の二つである。1は豚が美男に化して人間の女と交わる話であり、2は豚が美女に化して人間の男と交わる話である。

1の例を奄美本島、与論島、沖縄からそれぞれ一例ずつ引いてみよう。類話だが昔話研究者達にもあまり知られていないのであえて引用することにする。

① 「奄美本島・笠利」

七年になる豚が、夜々人間に化けて女の所へ遊びに来た。そこで草履の片方を取って隠したところが、翌朝、隣りの家の豚の爪が抜けてなかったそう。だから豚は何年も飼わず一年か二年で殺すのだそうだ。（採集資料）

② 「与論島」

昔あるところに、きれいな姉さんがいた。その家には十年余り飼われた種豚がいた。その豚が毎晩、美男子に化けて姉さんの家に遊びにきた。

その姉さんの家に別の男の人が遊びにきた。みるとその姉さんは豚と遊んでいた。びっくりした男は「豚と遊んでいる」と大声を出してしまった。

それを聞いた豚は、豚とわかるとぶうぶう泣きながら小屋にはいっていったという。

それで豚や猫等をあまり長く飼うものじゃないと。(田畑英勝『奄美大島昔話集』昭29年)

③ 「沖繩」

昔ある処に黒長布(黒マンサージ)を頭に纏うた男が居た。皮褰草履をはきこんでキャンヤたる姿をしていた。何日も若い女の群れに入ってこれを引っかけようとした。

ある日平日のごとく一人の少女を手込めにしようと思うて盛んに口説いた。少女はその本性を見破ることができなかった。彼女の友達はこの見破ることができた。それで彼女の友達はこの見破られたことを知って豚になってスゴスゴとその場を立ち去った。(佐喜真興英『南島説話』大11年) 右の三例を相互に比較して、相補いつつ、「豚掣入」のパターンをみてみると、

① 美女の元へ夜毎に豚が美男子に化して通ってくる。

② 傍でそれを見ていた人に(その異臭によって)正体をあばかれる。

③ 男の残した草履が豚の爪になっている。

④ 飼っていた老いた豚の爪がなくなっている。

⑤ だから豚はあまり長く飼うものではない。

今度は、2の「豚女房」とでも名づけられそうな型の例をみてみよう。これも研究者達が誰も注目しないので三例あげてみる。

① 「奄美本島・大和村」

昔、ありようたんちゅかな。

今度、殿様の家で男の子が夜々勉強していたところが、美しい雲のように、紋様のモガモガした着物を着た、見物になるような美しい女が毎晩来て、その勉強している男に話しかけ、男をなやませうとしてその側に坐っていた。しかし、男はその女を時々見ては、側へ寄ってくるとあちらへ、あちらへ寄ればこちらへ寄って、並ばないようにながら勉強を続けていた。女はそれでも、今夜こそ何とかしてこの青年を騙そうと思ってやって来た。ところが、女中の気のきいたのがいて、

「ああ、雨が降るが、女の人の草履を濡れないようにしまってこよう」

と言って、行ってみると、草履はなく、豚の爪があった。

「ああ、さては……」

と、変に思い、爪をしまっておいたところが、その女が、

「私の草履がないのですが」
というので、

「ああ、これではありませんか」

と言って渡すと、

「そう、これです」

と言って履いて行ったので、

「あげー、やっぱりそうか」

と思い、そおと後をつけて行ってみると、豚小屋に入って行ったので、

後から餌をやるふりをして行ってみると、豚になって餌を食べているので、よし、これは明日の

晩までためしてみようと思つて、若旦那に、

「昨夜はこうこうでしたが、若旦那は目のある方ですね」

と言つたところが、

「臭かったからだよ、臭い女だったんだよ」

「でしよ。こうこうだったんですよ」

「そうだったか、それはお前は感心なことをした。今晚までためしてみても明日は肉屋に売ろう」

と言つて、親には何とも言わずにいたら、またその女がやって来た。女中はお茶を持って、その二

人の間に来てお茶をすすめた。女はお茶も飲まずに帰るので、

「いよいよこれは豚だ。今度ははっきり見とどけた」

と言つて肉屋に売つたそうなの。その豚は紋様のある豚で、天の雲の様な美しい豚で、七歳になるま

でおいてあつた豚だったそうなの。(採集資料)

②「沖繩」

昔、或る処に毎晩、皮草履をはいて俯むいたまま、色目を使って通る美女が居た。何処の誰か若い男の中で此女を知つてゐる者は一人も居なかつた。ところが若い男等は誰言うもなく彼の美女をほめないものはなかつた。それでも彼女は黙つたまま一言も言はない。只だ六錢(三貫)の御金を与ふれば、彼女は一夜を自由にせられてゐたものだといふ。

或る日若者等は此無言の美女の住所や名前を聞かうと思つて色々戯れたが、只だ笑ふばかりで返事すらもしなかつた。若者は彼女のはいている皮草履を脱がせて奪つた。彼女は足をひき、何処とはなしに行き去つてしまつた。

翌朝其皮草履をあらためてみたところが、若者等は腰を抜かさんばかりに吃驚した。これはそもそも何であつたであろう。奇怪も奇怪それは豚の爪であつた。

若者等は早速集つて各家の豚小屋をしらべたところが、と或る家に数十年も過ぎた老豚が爪を抜かれたまま打ち倒れてゐた。初めて之が化けたことを知り、尚また毎朝豚小屋で金六錢を拾ふ主人の

謎も解けた。これから淫を売る女を「三貫ナリ」といふそらだ。今でも娼妓や淫売婦には「三貫ナリ」といってゐる。(島袋源七『山原の土俗』大14年)

③〔沖繩〕

昔安里の上の墓の前で代を経たる老豚とある男と交情したことがあったという。この豚は人間と一所に夜遊びもしよつたと云うことである。(佐喜真興英『南島説話』大11年)

「豚掣入」と同じように、「豚女房」を相互に比較して、相補いつつパターンをみてみよう。

- ① 男の元へ美女が出入りする。
- ② 傍でみていた人に(異臭によって)正体をあばかれる。
- ③ 奪った草履が豚の爪になっている。
- ④ 老豚の爪がなくなっている。
- ⑤ 豚は長く飼うものではない。

というようにまとめることができよう。「豚女房」と名づけるには、いささか躊躇させられる話である。「狐女房」「蛤女房」等々の異類求婚譚とは著しく異なり、婚姻が成立するわけではない。いわば「豚の妖怪にだまされた話」である。しかし、さきの「豚掣入」と区別するため、便宜的にこの稿ではこう称しておこう。もちろん「豚掣入」という名称も他の異類求婚譚とは違い昔話としては未成熟であるが、昔話への傾斜がうかがわれるので、あえて「豚掣入」とこの稿では称しておく。

「豚掣入」と「豚女房」とは豚が女に化すか、あるいは男に化すか、の違いだけである。しかし、この違いは両者の話を分別して考えなければならなくなるか、男が先か、女が先かの派生の問題になるか、採集と研究の進展につれて大きな問題となるところである。

「豚掣入」を考えてみると、これは「蛇掣入」字環型を想起させられてしまふ。「蛇掣入」の字環型は、夜ごとに通ってくる男性に傍の人の忠告で糸を通した針をさして、後をつけていったら蛇の穴の中に入ってしまった。それで、それが蛇であったことが判明する、という話である。蛇を水の神としてあがめ、神話として語られたり、伝説として語られたり、昔話として語られたりする。もともと神話的なものから昔話になったものであろうが、昔話になった時には、人々は蛇を神としてではなく、いまわしいものとして意識している。

「蛇掣入」は男が蛇と判明した後も、蛇の子をおろしたり由来譚になったり、いろいろ発展があり、話はおもしろく展開していく。その発展は「豚掣入」にはない。

「蛇掣入」字環型が奄美、沖繩地方に非常によく伝承されている代表的な昔話であることを考えると、「豚掣入」と「蛇掣入」の類似点と相違点はおさえておかねばならないだろう。

まず、この「蛇掣入」字環型と「豚掣入」の類似しているところは、①異類が女の元へ人間に化して通う。②傍で見ている人によって忠告される。③化身であることが判明する、というところである。また、「豚掣入」の「蛇掣入」や他の異類求婚譚と違うところはその正体のみやぶられ方にある。

異類求婚譚において、その正体をみやぶられた時に婚姻は破局をむかえるのであるが。一つは、いくつかの話が共通して奪った草履が後に豚の爪になつていたので正体が判明するとなつているところである。南島の人々には「豚の爪」に対する特別な目があったのかもしれない。もう一つは、においによって正体をみやぶられるという形であり、他の異類求婚譚にはあまりない方法である。現実の豚の異臭を背景にしているのであるが、嗅覚によって魔様な物が近くに存在することを感知する能力を南島の人々は持っている。「野原で山羊の香のする時は山羊の幽霊が居るのだ」(『山原の土俗』)とか、山で山羊のおいなどがしても気づかないふりをしなければいけない、などと言う。どんなに正体をかくしても、においだけはかくしきれないで、人間にかんづかれてしまうのである。

④

「蛇掣入」が掣入婚の時代をのぞかせてくれると同様、「豚掣入」で男が女の元へ通うのは単に「蛇掣入」からの影響だけでなく、南島にそう遠くない時期まで男が女の元へ通うという風習が存していたからであろう。「豚掣入」に「蛇掣入」のようなその後の話の発展した形ものが採集されていないのを見ると、後半が忘れられたのではなく、まだ話としては未成熟なのだとみるべきなのかも知れない。「蛇掣入」や「猿掣入」が現代の人々の蛇・猿に対するイメージからある距離をもって昔話と

して一人歩きしているのに比べ、「豚掣入」は南島の人々の豚に対するイメージから、そう遠くないところで話されている話である。そして、それは世間話的な昔話、あるいは昔話的な世間話であり、まだ豚が妖怪としてあちこちに出没し、それを恐れていた人々の精神構造の生んだ話であろう。

実際、南島において豚の妖怪はあちこちのこわい場所にひんばんに出没して最近まで南の島の人々をおそれさせていた。

①耳切れ豚の話(奄美本島・名瀬市)

小宿と朝仁の間の、一里塚という所には、耳のない小豚が現れ人々を迷わす。といわれており、その時は足を×に交差させたらよいそうです。その豚が股をくぐれば何か危険の前知らせといわれています。また、朝仁からちよっと離れた三角浜という所ではきれいな女が現れてきて、そこを通る人の前になつたり後になつたりして通行人を困らせたそうです。(田畑英勝『奄美大島昔話集』)

②首のない豚(喜界島)

(略)首なし子豚を殺しても生霊が飛び出して幽霊のとりこになって、一週間前後には生命を落すことになる(略)(三井齊禎『喜界島古今物語』昭40年)

このような話の例は非常に多い。たとえば、与論島には「豚の物」が出没し、沖繩にも「豚の化け物」が出没している。これらの豚の妖怪は、本土のスネコスリと似ている。②の「首のない子豚」は、本土の福井、杵岐島、四国の阿波などに伝承される「首なし馬」と関係がありそうだ。蛇足だが、南

の鳥々には「山羊の物」「首のない山羊」「首のない馬」「牛の妖怪」等々の妖怪が道の怪としてよく出没するのである。

「豚俣入」が生れ、伝承される基盤には、こういう、人々の豚に対する意識が大きく影響しているであろう。

それは次の豚に対する南島の人々の、単なる家畜としてではなく、非日常的な目でみた時の意識が大きくものを言っている。

南島の豚の声は鶏鳴と同じように魔物を退散させる時を知らせるという力を持っていたのかも知れない。「便所には霊力の強い魔除けの神(豚の神)がいるとの信仰があり、夜道歩きしての帰り、必ずフルに行つて豚を起す風習があった」(『伊平屋列島文化誌』)。これは伊平屋島だけにかぎったことではなく南島の広い地域では、つい最近まで何か異様なものを見た時、豚小屋に行き豚をなかせていた。また何かとあることに、豚小屋まで足を運ぶ奄美・沖繩の人々の民俗信仰からも推察できる。そして、「豚小屋の神は高神である」という広く奄美・沖繩に伝えられている俗信もそれを示している。豚に対する、単なる家畜としてだけでない非日常的な目を『山原の土俗』の俗信からひろってみると、

△豚小屋に唾をはいてはいかない。

○豚は盲神といふ故、若し唾をはいたら貧乏神になってしまふ。

△唾をした時、「糞食クソクシ」といはねばいかない。

○豚の化物が竹で鼻をつつく。

△豚小屋で驚くものではない。

○必らず霊が抜け出てしまふ。

△豚小屋におつこちてはいかない。

○必らず一寸法師ササキになる。又石女イシメまた石男イシヲになる。

△豚小屋で妖怪火を見たり霊を見たりした時はお願せねばならぬ。

○其所で見る物は全部自分の霊であると。

△水死者の死体が上らぬ時は豚の頭を海に投げこまねばならぬ。

△麦粒症になった時は、貝殻を豚小屋に吊り下げ、又は末子をして葉指で突かしたらならぬ。

△豚の夢は人の呪を受ける。

『山原の土俗』一冊にこれだけの豚の俗信がはいっている。(いくつか割愛したものもある。)また、『山原の土俗』には、イチジャマという、人を呪咀して病を起こしたり殺したりするのが、豚に化けることもあるということが書かれている。

(5)

豚はまた、南島においてハレの日の食物でもあったことは多くの民俗学者によって報告されているところである。奄美で十二月二十七、八日を「豚を屠る日」と定めて、一年中飼ってきた豚を正月の御馳走として殺したり、沖繩では正月だけでなく葬式にも豚を殺す風がある所がある。

また、何か異変があった場合には豚を殺し、足などを屋敷の四隅に下げおくと、厄払いになるとも伝えられている。(これと似た例は、徳之島の面縄でシマクザラシといって牛を殺し、村中の人が皿を持ちよって会食し、牛の足は部落の四隅に掛けておく祭りがある。喜界島でも牛を殺したり、所によっては鶏を殺したりして村の四隅に掛ける、という例もある。)

豚の「にえ」について、このような昔話が伝承されている。岩倉市郎編『沖永良部島昔話』(昭15年)をみてみよう。これは、ある長者が、貧しい者が味噌などを貸してくれと来ても貸さなかつたので豚になつたという話である。後半をみてみよう。

……神様は杖で彼を打つた。一つ打つたら背骨を打出し(尻尾になる)、二つ打つたらアツチマダ(足爪)を打出し、三つ打つたら豚になつた。

神様は皆に言われた「彼を石マキ(豚小屋)に入れて人間の食い残しを与え、人間のミーンシキハナ

シキ(病氣)の時には、彼を殺して人間のドゥッシヌミッシヌ(身代り)にせよ」と。
類話もあるが、いずれも人間の身代りに豚を殺せ、という話になつている。

奄美、沖繩に「豚は長く飼うものではない」とか「豚は二、三年で殺すもの」という俗信がある。

この俗信と話と、どちらが先かは判じがたいが、互いに支持しあつて伝承されてきたことは確かである。

南島の人々は、単なる家畜として豚を見つづも、非日常的な豚のイメージをどうしてもぬぐいさることができず、つい豚の妖怪を見てしまつたり、また、そういう精神構造が「豚掬入」を作りあげ、伝承していったのであらう。